

観点別学習状況の評価と評定への総括について

観点別学習状況の観点ごとの評価および評定を総括するために、次のような手順が必要になる。

- 1 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括
 - (1) 単元における観点ごとの評価の総括
 - (2) 学期末における観点ごとの評価の総括
- 2 観点別学習状況の評価から評定への総括
 - (1) 基本的な考え方
 - (2) 学年末における観点ごとの評価の総括と評定への総括

1 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括 (1) 単元における観点ごとの評価の総括

単元の評価計画をもとに、教師用補助簿を活用する
評価の観点及びその趣旨についての理解

《社会的事象への関心・意欲・態度》

社会的事象に対する関心を高め、それを意欲的に調べることを通して、社会の一員として自覚をもって責任を果たそうとする。

《社会的な思考・判断》

社会的事象から学習の問題を見いだして追究・解決し、社会的事象の意味を考え適切に判断する。

《観察・資料活用の技能・表現》

社会的事象を的確に観察、調査したり、各種の資料を効果的に活用したりするとともに、調べたことを表現する。

《社会的事象についての知識・理解》

社会的事象の様子や働き、特色及び相互の関連を具体的に理解している。

下記の教師用補助簿（例）を、単元ごとに1枚作成する。

「教師用補助簿（例）」＜単元別一覧表＞ 年生 単元「 (全6時間)」 [表1]

時間		1	2	3	4	5	6	計
名前	重点とする観点	関・意・態	思考・判断	技能・表現 知識・理解	技能・表現 知識・理解	思考・判断 技能・表現	関・意・態	
1	関・意・態							
	思考・判断							
	技能							
	知識・理解							
2	関・意・態							

空欄の箇所は、その単位時間に設定した評価規準に対応している。

上記例 [表1] の場合

- ・社会的事象への関心・意欲・態度 2 / 6 時間
- ・社会的な思考・判断 2 / 6 時間
- ・観察・資料活用の技能・表現 3 / 6 時間
- ・社会的事象についての知識・理解 2 / 6 時間

単元の目標を達成するために
見とる観点をバランスよく配分する。

一人一人の学習状況に応じて指導する

の補助簿の他に、1単位時間ごとに机列表等を活用して特にその時間に見とる児童の学習状況を具体的に把握するなどの工夫を加える。

すべての児童が「おおむね満足できる」状況を実現することができるよう、特に指導・援助を要する児童への個別指導を充実させる。

記録をするために、補助簿を持って動き回るようなことは好ましくない。

評価資料の整理・集計をする

授業終了時に「おおむね満足できる」状況より質的に高い児童についてはA()、「おおむね満足できる」状況に至らない児童についてC()を教師用補助簿に記入する。[表2]

特に記述すべき事実があった場合は、その時間の観点となっていなくても、メモしておく。([表2]網掛け内のコメント)

授業終了後あるいは単元終了後に、自己評価表等も参考に加筆・修正を加える。

「記録後の教師用補助簿(例)」<単元別一覧表> 年生 単元「 (全6時間)」[表2]

時間		1	2	3	4	5	6	計
名前	重点とする観点 観点	関・意・態	思考・判断	技能・表現 知識・理解	技能・表現 知識・理解	思考・判断 技能・表現	関・意・態	
	1 岐阜太郎	関・意・態	A		意欲的発言			A
思考・判断								B
技能・表現					A			B
知識・理解								B
2	関・意・態	C		集中			C	C
	思考・判断				個別指導			B
	技能・表現		読みとり				ノート指導	B
	知識・理解			C	C			C
3	関・意・態	A					A	A
	思考・判断		A			A		A
	技能・表現			A		A	ノート	A
	知識・理解			A	A			A

* 空欄はおおむね満足の状況「B」

児童の成長の過程を評価する個人内評価も合わせて重視し、通知票や指導要録の所見欄に記述し、認め価値付ける事実としたい。

(2) 学期末における観点ごとの評価の総括

名前	単元 観点	単元 1	単元 2	単元 3	単元 4	単元 5	観点別の 総括
		1 岐阜太郎	関・意・態	A	A	A	
	思考・判断	B	B	B	B	B	B
	技能・表現	B	A	B	B	B	B
	知識・理解	B	A	A	B	B	B

2 観点別学習状況の評価から評定への総括

(1) 基本的な考え方

評定は、学習指導要領に示す社会科の目標に照らして学習の実現状況を総合的に評価するものである。観点別学習状況の各観点は、学習指導要領に示す社会科の目標に照らして学習の実現状況を分析的に評価するものであり、観点別学習状況の評価は、評定を行う場合において基本的な要素となるものである。この両者の関係を前提とすると、観点別学習状況の評価結果を総括していけば、観点別学習状況の評価と評定が以下のような対応関係にあることが理解できる。

観点別学習状況の評価		評定	
十分満足できる	A	十分満足できる	3
おおむね満足できる	B	おおむね満足できる	2
努力を要する	C	努力を要する	1

「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」				「評定」
A	A	A	A	「3」
B	B	B	B	「2」
C	C	C	C	「1」

上記の場合を除き、各観点ごとのABCが決まれば評定も必然的に決まるものではなく、様々な組合せが考えられる。同じ「A」「B」「C」という評価結果についても、それぞれの評価結果が示す実現状況には幅があり、日常観察や各単元の評価の積み上げから総合的に判断する。

(2) 学年末における観点ごとの総括と評定への総括

学期末の観点ごとの評価の総括（通知票等への生かし方を含む）

< 岐阜太郎さんの場合 >

名前	観点	単元	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	観点別の総括	通知票等
1	岐阜太郎	関・意・態	A	A	A	A	B	A	2
		思考・判断	B	B	B	B	B	B	
		技能	B	A	B	B	B	B	
		知識・理解	B	A	A	B	B	B	

各学期毎に集計をした結果について、年間の総括をする。

名前	観点	学期	年間総計			観点別の総括	評定
			1学期	2学期	3学期		
1	岐阜太郎	関・意・態	A	A	A	A	3
		思考・判断	B	A	A	A	
		技能	B	A	A	A	
		知識・理解	B	A	A	A	

